

安全論文
「安全意識」

出光タンカー（株）
三等航海士 川田 友里

私は現在 VLCC の三等航海士として乗船しています。

入社してから初めての乗船で4カ月が経ちましたが、当初は右も左も分からない状況でした。船上では全乗組員に対して安全に対する意識や安全な行動が高く求められています。単に安全と言っても個人の安全から、船全体の安全まで様々ですが、一番大切なのは、怪我をしない、させないことが大切だと教えられました。

船上は陸とは違い車に轢かれる心配は全くありませんが、だからと言って信号も気にせずにデッキ上やエンジンルームをふらふら歩いていても怪我をしないということはありません。船は陸以上に危険な機器や構造物が身近にたくさんあります。例えばデッキ上では、係船中は係留索が張られていて、万が一係留索が切れた場合にスナップバックゾーンにいと自身の生命にかかわる重大な事故に繋がる恐れがあります。そのようなことになれば、怪我をした本人だけではなくその家族や周りの人たちに対しても迷惑がかかります。そうならない為にも日頃から周りに危険がないか察知し、事故を予防する意識が大切なのだと感じています。

学生時代に練習船で実習をしてきたので、船にはどんな危険があり、どのような事故が起こり得るのかある程度は理解をしていたつもりでした。しかし、会社の船は練習船にはなかった甲板機器や設備が多くあり、その分危険も多く存在しています。乗船前に研修で安全対策の講習を受けてきましたが、実際に乗船して作業に参加するまではなぜそのような対策をとるかは理解できませんでした。しかし、乗船してから甲板作業をするうちに現場にどんな危険が潜んでいるのかを知ることができ、その危険に対する安全対策も理解することが少しずつできてきたような気がします。

危険を理解し、その安全対策を立てるには机上のみで考えるのではなく実際の現場でその危険性を体験することも大切だと思います。乗船中に、経験して始めてその危険を知る機会がありました。私が初めて内検のためにバラストタンクに入る際、事前にタンク中は滑りやすいので注意するように教えられました。実際に中に入ってみると、懐中電灯を使用していたとはいえ、中は暗く、タンク内の構造をよく理解してなかった私にとってはタンク内を移動することすら困難でした。そんな中、足を滑らせて転倒してしまいました。幸いにも受け身を取ったおかげで怪我をすることがありませんでした。滑りやすいとは聞いていましたが、認識が甘く、対策を十分に取っていなかったのが原因でした。移動する際は必ず片手はなにかで支えて、常に三点支持でバランスを保つべきでした。この体験からは常に三点支持を行い、万が一滑りそうになっても転倒することないようにしています。そして次に入社してくる後輩たちにはこの経験談を直接伝え、

怪我をさせないようにしていきたいと思います。

危険を体験することも大切だと述べましたが、危険を体験してから安全対策を考えるのでは、取り返しがつかないこともあります。ただ危険を知り、怪我をしないように気をつけるだけではなく、具体的にその危険に対しての安全対策を考え、行動していくことが必要だと思います。また上司や先輩の経験談も活かして、チーム全体で危険を共有し、怪我をしないようにしていくことは非常に重要です。

事故が起きた場合、新人であることは理由にはなりません。常に日頃から危険を探し、気づく感性を磨いていく必要があります。そして危険を感じた場合には、すぐに乗組員全員と情報を共有し、共にその危険に対する安全対策を考えていきたいと思います。そうした意識を持つだけで船内の安全性を向上させることが出来、怪我発生件数を減らすことが可能だと思います。また、作業前には安全装備の確認や指さし呼称を徹底し、作業中は常に全体を見回して危険なところがないか注意し、安全作業を実行したいと思います。